

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	練馬区大泉学園町
園名	アスク大泉学園保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

走るを考えてみよう

<テーマの設定理由>

子どもたちは日々の遊びの中で、追いかっこや鬼ごっこなどを通して「走る」ことを楽しんでいる。3～5歳児の時期は、体の使い方が発達し、走る速さや動き方にも個人差が見られるようになるとともに、「もっと速く走りたい」「上手に走りたい」という気持ちが育ってきた。そこで、「走る」をテーマに取り上げることで、自分の体の動きに関心を持ち、どのようにすれば速く走れるのか、楽しく走れるのかを考えるていきたい。その中で主体的に体を動かす楽しさを味わうことをねらいとする。さらに、友だちと一緒に走る中で、自分なりに考え、工夫しながら体を動かす面白さや達成感を感じられるよう、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

6月から1月まで、月に1回体操講師と保育士と子どもたちとで、走るについての探究活動を行った。講師との活動の中で出た意見や、考え、子どもの疑問や探求心を保育の中で考えていく。子どもの探究心や興味に目を向け、問いかけや内容を柔軟に変えていけるようにした。

6月～9月 足の速い遅い動物について探究、タイム測定

10月～12月 かけこの姿勢について、動物と人間の足の速さの違い、速く走れる遊び・動きを考える

1月 タイム測定・まとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・ホワイトボード・ペン・・・子どもたちの意見をまとめるために使用
- ・動物絵本(図鑑)・動物カード・タブレット・・・足の速い・遅い動物を視覚的に分けるため・考えるために使用
- ・タイマー・記録用・リングマーカー・広い環境(テラス・室内で体が動かせるスペース)・・・タイム測定時に使用
- ・しっぽ取りのしっぽ・・・足が速くなる遊びをする際に使用
- ・つないでラダー,ヒルトップス,アーチ

4. 探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える：「速く走る」とはどういうことなのか、どんな姿勢で走ると速くなるのか、子どもたちは自分の考えを出し合いながら考えていた。

腕の振り方や体の傾き、足の動かし方などに目を向けると、一人ひとり違いがあることに気付きはじめる。どんな走り方が速いのか、本当にその姿勢で速くなるのか、実際に体を動かしながら確かめていくことにした。

また、「足が速い動物は何だろう？」と想像を広げると、さまざまな意見が出てきた。絵本や図鑑で調べたり、動物の動きを真似してみたりする中で、「動物はどのように走るのか」「人とどちらが速いのか」といった新たな疑問が生まれた。

さらに、実際にスタートからゴールまで走り、速さを測ってみることで、自分や友だちとの違いにも気付いていた。

どうすればもっと速く走れるのか、どんな遊びをすると速くなるのか、考えたことを試しながら探究を深めていくことにする。

「走る」とはどんな動きなのか。どうすれば速くなるのか。

子どもたち一人ひとりの気づきや疑問を大切にしながら、体験を通して考えを広げていった。

探究活動の様子：

「走る」をテーマに、グループごとに走る姿勢や動物の速さについて話し合い、全身で表現する姿が見られた。「体が重いからゆっくり」「足がないから遅い」など、理由を考えながら共有し、イメージを広げていた。

タイム測定では、数字の大小の理解に難しさが見られたが、保育者が比較しやすい声かけを行うことで理解が進み、興味をもって取り組む様子が見られた。また、「腕を曲げる」「手はグーにする」など、走り方に着目した気づきを子ども同士で共有していた。

動物の動きを取り入れた活動では、なりきって走ることと普段の走り方を比較し、体感的に速さの違いに気付く姿があった。図鑑を用いた活動では、動物と人間の速さについて考え、「チーターには勝てない」など具体的な意見を出し合っていた。

速く走るための姿勢については、「腕を前後に振る」「つま先で走る」といったポイントを意識しながら実践し、体が軽くなる感覚に気付く子もいた。こうした気づきをもとに、「鬼ごっこをすると速くなる」といった遊びの中での発見へとつながっていった。

さらに、跳ぶ動きにも着目し、足裏全体とつま先での違いを体験的に理解していた。つま先で動くことの大変さや動きやすさに気づき、体の使い方への関心が高まっていた。

速く走るための動きを探る中で、ジグザグ走りや動物の動きを取り入れた活動にも挑戦し、「速そうだけど難しい」といった気づきが生まれていた。また、重心や地面の蹴り方にも意識が向き、体の使い方を楽しみながら学んでいた。

最後に行ったしっぽ取りでは、これまでの探究で得た走り方や体の使い方を意識しながら遊ぶ姿が見られ、学びが遊びへとつながっている様子がうかがえた。

ふりかえり(保育士の気づき)：

走ることについて考える際、言葉だけの理解が難しい年齢であったため、図鑑や絵カードなど視覚的な教材を用いることで、子どもたちがイメージをもちやすくなった。一方で、動物の姿は知っていても速さの違いを捉えることは難しく、動画視聴や比較活動など、さらに多様なアプローチの必要性を感じた。

実際に体を動かし、動物になりきって表現することで、子どもたちの考えや意見が広がり、主体的に発言する姿が見られた。子どもの意見を尊重しながら引き出す関わりや、体の使い方に着目した声かけにより、探究する楽しさを感じられる時間となった。

また、話し合いだけでは理解が深まりにくい場面もあったため、実際の動きを通して速く走るための姿勢や動きを意識できるよう援助することの大切さを実感した。園外でのびのびと体を動かす活動を取り入れることで、より具体的に観察や気づきを深められる可能性も感じられた。

3歳児なりの疑問や探究に寄り添いながら活動を進めることで、一人ひとりの気づきを大切にしたい充実した時間となった。

【4歳児実施分】

問いを考える：「走るってなんだろう」というテーマのもと、まず足の速い動物と遅い動物について考えてみた。

言葉だけではすぐに答えが出にくいので、動物表を見ながら保育者と一緒に調べていった。

次に、足の速い動物の動きを想像して、実際に体を動かしてみることにした。

動物になりきって走ったり、人間と比べたりすることで、「どちらが速いかな？」と考えていた。

スタートからゴールまでのタイムを測ってみると、速く走る姿勢や体の使い方に気づくことができた。

その後、グループで丸くなって話し合い、「足が速くなる遊びはどんなものがある？」という問いを出し合いながら考えていた。

室内でもできるジグザグ走りやカエル歩き、おしり歩き鬼ごっこなど、いろいろな方法を試してみることにした。

さらに、「速く走る時、足のどの部分を使うとよいか」「かけっこの走り方はどうすると速くなるか」について考え、実際に体を動かして確かめた。

タイム測定や競争を通して、自分の体の使い方を意識し、速く走る工夫を見つけていった。「早く走るためにはどうすればよいか」を考え、体の使い方や動きの工夫を実践しながら理解を深めていけるような問いをしていった。

探究活動の様子：

「走るってなんだろう」というテーマのもと、子どもたちは足の速い・遅い動物について考え、動物表を見ながら意見を出し合い、友だちと情報を伝え合っていた。動物の動きを真似する活動では、グループに分かれ、絵を見てイメージした動きを実際に表現しながら考えを共有していた。

タイム測定では、手や腕、足の使い方や姿勢を意識して走る姿が見られ、どの姿勢が速く走れるかを話し合う中で、速く走ることへの関心が高まった。また、動物になりきって走る体験を通して、人間が普段通りに走った方が速いことに気づき、体の動きや速さを実感していた。

足が速くなる遊びについても意見を出し合い、「かけっこ」「リレー」「鬼ごっこ」などを実践。体の使い方や走り方のコツを子ども同士で教え合う姿も見られた。つま先で走る、腕をしっかり振るなど、速く走るための体の使い方を実際に体験しながら理解していた。

室内では、おしり歩き鬼ごっこやジグザグ走り、カエル歩きなども行い、遊びながら体の使い方や速さを試すことで、瞬発力や追いかける力を育てた。競争や計測を通して、速く走れることへの意識や達成感を感じる子どもも多く、「早く走れた」という実感を得ていた。最終的に、つま先や腕の使い方を工夫することで速く走れることに気づき、体の使い方やバランスを意識して走ることの楽しさや達成感を味わう姿が見られた。

ふりかえり(保育士の気づき)：

動物について考える際、子どもたちは素材や環境が整っていないとイメージしにくい様子が見られた。図鑑や動物表を用意することで、少しずつイメージが膨らみ、知っていることを友だち同士で共有する中で、動物の足の速さについて考えを広げることができた。

人間が動物になりきって走る活動では、実際に体を動かしながら、人間の速さには勝てないことに気づき、新しい知識や理解を深める姿が見られた。振り返りの時間を設けることで、走る姿勢や足の使い方などを子ども同士で再認識でき、考えを共有する経験が豊かになった。

リレーや鬼ごっこなどの走る遊びでは、速く走るためのポイントに気付き、友だちと伝え合うことで、他の活動にも活かせる学びの環境ができた。体を動かしながら試すことで、速く走る感覚や意識を実感でき、探求や疑問を考え続けることの大切さにも気付くことができた。

【5歳児実施分】

問いを考える：

「走るってなんだろう」というテーマのもと、まずは速く走るためにはどんな姿勢が良いか考えてみた。

足の速い動物や遅い動物はどんなものがあるか、みんなで意見を出し合い、水や陸の動物の速さも比べてみた。

動物の走り方の特徴を観察しながら、実際に体を動かして真似してみることで、動きの違いや速さのポイントに気付くことができていたようだった。

さらに、人間と動物、どちらが速く走れるかも比べて考えてみることにした。

次に、足が速くなる遊びやゲームを考え、実際に体を動かして試してみた。

その中で、「より速く走れる遊び」や「楽しく取り組める方法」をみんなで共有する時間を作った。

速く走るための腕の振り方や足の上げ方、姿勢についても話し合い、四つん這い走りやジグザグ走りなど、いろいろな走り方を比べて新しい発見をしていった。また、スタートダッシュや駆け足、ジャンプの後に走るとどうなるかも問い、試してみた。

最後に、ケンケン跳びをするときはどんな着地の仕方が速く進めるのかを考えた。足の裏全体で着地するより、つま先で着地した方が速くなるのか、体を動かしながら検証してみることにする。体を使って考えることで、速く走るための工夫やコツについて問いを重ねていった。

探究活動の様子：

子どもたちは図鑑や絵カードを使い、水や陸の生き物・動物の足の速さについて考え、速い・遅いを分類しながら探求心を高めていた。なぜ速いのか、遅いのかについても意見を出し合い、動物の特徴をとらえて真似する中で理解を深めていた。

タイム測定では、自分の速さを知ると喜び、友だちのタイムと比べることで、「どうしたら速く走れるか」を考える姿が見られた。足が速い子の腕の振り方や足の上げ方を観察し、走るコツを見つける姿もあった。

動物になりきって走る活動では、跳び方や動きによる速さの違いを体感し、人間と実際の動物の速さの違いを意識することができた。足が速くなる遊びについても話し合い、リレーや鬼ごっこ、だるまさんが転んだなどの意見を出し、なぜ速くなるのかを考えながら実践していた。

室内活動では、カエル跳び鬼ごっこを通して、足の使い方や速く進むための体の動きを試すことができたが、足の速さに直接関係しないことにも気付くなど、多角的に考える姿が見られた。

テラスでの四つん這い走りやジグザグ走りでは、体のバランスや姿勢に注意しながら走ることで、体の使い方や体幹の大切さを体感した。スタートダッシュや駆け足の準備の工夫も試し、ジャンプの後よりも先に駆け足をすると速く走れることに気付くなど、実験的に体で学んでいた。

まとめとして、ケンケン跳びではつま先を使うことで速く進めることに気付き、鬼ごっこではバランスや体幹を使うことの大切さを理解し、探求で得た気づきを遊びの中で活かす姿が見られた。

ふりかえり(保育士の気付き)：

動物について考える際、子どもたちは図鑑を使って自分で調べることができ、グループで写真や画用紙にまとめて話し合う場を作ることによって、意見を出しやすくなったと感じた。

「走る」を考える中で、足を上げる・腕を振るなど体の使い方に意識を向けることで、速く走るコツを掴み、実践を通して満足感を得る姿が見られた。保育士が講師との活動を振り返ってから新しい問いを投げかけることで、子どもたちの意見がより活発に出る環境を作ることができた。

足が速くなる遊びについては、グループごとに異なる意見が出て、子ども同士で気づきを共有する様子もあった。戸外で遊ぶ際には、速く走る姿勢を意識する子が増え、体の使い方を学んだことが遊びや自信につながる様子が見られた。

子どもたちの声を尊重し、「なぜ？ どうして？」と問いかけることで、探求心を広げられる活動になったと感じた。

5. 活動の様子が分かる写真

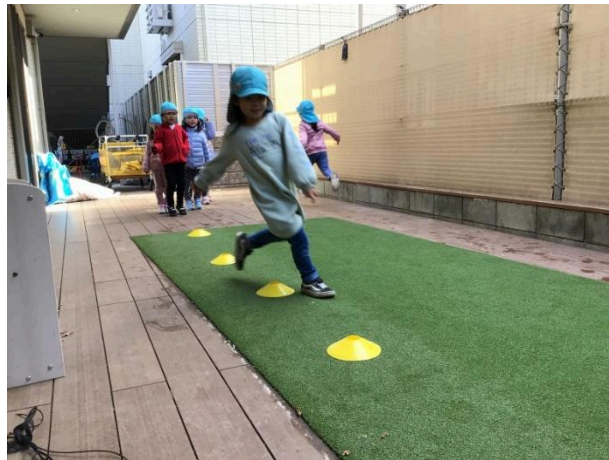
3歳児

活動の様子が分かる写真 2枚以上を貼付してください。
(HPなどで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。)



4歳児

活動の様子が分かる写真 2枚以上を貼付してください。
(HPなどで公開する可能性があります)



5歳児 活動の様子が分かる写真 2枚以上を貼付してください。
(HPなどで公開する可能性があります)



とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都練馬区大泉学園町
園名	アスク大泉学園保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

声

<テーマの設定理由>

子どもたちは日々の生活の中で、声を使って思いや気持ちを伝えたり、友だちや保育者と関わったりしている。3～5歳児の発達段階においては、言葉のやり取りが豊かになる一方で、思いがうまく伝わらなかったり、表現に戸惑ったりする姿も見られる。

そこで、「声」をテーマに取り上げることで、声の出る仕組みや不思議に興味をもち、楽しみながら理解を深めていくとともに、声の大きさや使い方、伝え方について考える機会としたい。自分なりの表現の仕方を広げていったり、友だちと気づきや発見を共有しながら、協働する楽しさや表現する喜びを味わってほしいと考え、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

6月から1月まで、月に1回音楽講師と保育士と子どもたちとで、声についての探究活動を行った。講師との活動の中で出た意見や、考え、子どもの疑問や探求心を保育の中で考えていく。子どもの探究心や興味に目を向け、問いかけや内容を柔軟に変えていけるようにした。

6月～8月 声が出る仕組み・擬音ジェスチャーの表現・声の大きさ・何の鳴き声

9月～10月 声・オノマトペ・楽器で物が動くか・楽器の音が鳴る仕組み・歌

11月～月 合奏をしてみよう・音と表現・音の高さ低さ・まとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・A4用紙・細長い折り紙・・・喉に見立てる・揺れる動きを確認のために使用
- ・紙コップ・・・メガホン
- ・イラストカード・・・ジェスチャーで使用
- ・アプリ・・・声の大きさを示す
- ・スズランテープ・新聞紙・・・声の空気で揺れる性質を分かりやすく伝える
- ・ビニール(黒)を張ったタライ・塩・・・声で塩・ストローは動くか
- ・折り紙
- ・楽器(タンバリン・カスタネット・鈴・マラカス・ハンドベル・ピアノ)
- ・ビニールを張ったタライ
- ・色水・ボンボン(手芸素材)・ペットボトル・ペットボトルキャップ・缶・画用紙・クレヨン・プラスチックコップ・お菓子の筒・卵パック・毛糸・てぐす・麻紐・洗面器・養生テープ・身近なもの・水2lペットボトル・袋
- ・丸いもの
- ・音源・スピーカー・声の大きさ表

4. 探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える：人は、毎日「声」を使って、思いを伝えているが、
では、その声は、いったいどのようにして生まれているのか考えることにした。

のどに手をあてて声を出してみると、ブルブルとふるえていることに気づく。
このふるえは、どこから来ているのか、息・のど・体の中で何が起きているのか問いを重ねた。また、声を使わなくても、ジェスチャーや動き、音まね（擬音）を使うことで、相手に伝えることはできるのか考えた。さらに、「音」は物を動かす力を持っているのか。大きな声や楽器の音で、紙や水は動くのか。実際に試してみることにした。

楽器に目を向けると、太鼓、笛、弦楽器など、さまざまな音の出し方があり、
これらの音は、どのような仕組みで生まれているのか、手作り楽器や本物の楽器を使って、音のひみつを探っていく。音楽に合わせて合奏をしてみると、同じ楽器でも鳴らし方によって音が変わることに気づく。

「声」や「音」の不思議について、自分なりの考えをもちながら、実験や体験をして問いを重ねていった。

探究活動の様子：

声が出る仕組みを体験した後、声当てクイズに取り組んだ。子どもたちは声をよく聞き、友だちや保育者の声を思い出しながら楽しむ姿が見られた。また、口の動きを観察して言葉を推測したり、同じ口の形を真似したりと、一人ひとりが主体的に探究していた。

メガホン作りの活動では、声の届き方を実験し、声が大きくなることや、小さな声でもはっきり聞こえることに自ら気付く姿があった。こうした発見を通して、興味や意欲がさらに高まっていった。

イラストカードを用いた活動では、ジェスチャーや擬音を使って相手に伝えることに挑戦した。友だちの表現を見る中で、多様な視点からイメージを広げたり、自分の表現が伝わる喜びを感じ、共有する様子が見られた。

音と動きの関係を探る実験では、声や楽器の音で物が動くかをグループで検証した。声の大きさや距離を変えながら試す中で、距離が近く大きな声のときに新聞紙が揺れることを発見した。また、塩が声によって振動することや、素材によって動き方が異なることに気付いた。楽器の音ではあまり動かないものもある一方で、色水は鈴やカスタネットで大きく動くことを見つけ、新たな発見へとつながった。さらに、土台を変える実験も行い、トレーの上で最もよく動くことに子ども同士で気付くことができた。好きな組み合わせで試せる環境により、探究への関心が深まっていた。

手作り楽器の活動では、水の量によって音が変わることに興味を示した。楽器の仕組みについても、実際に触れながら特徴を捉え、友だちと考えを共有しながら理解を広げていった。

合奏活動では、ただ音を鳴らすだけでなく、動かし方を工夫して音の強弱を表現しようとする姿が見られた。曲に合わせて鳴らし方を変えたり、タイミングについて意見を出し合う中で、「強いところは強く鳴らす」など音の表現に対する気付きが生まれていた。

ふりかえり(保育士の気付き)：声の仕組みの探究から始まり、さまざまな実験を通して、子どもたちの声や音への興味が大きく広がっていった。また、ジェスチャーなど声以

外の表現方法にも触れる中で、気持ちは声だけでなく全身で伝えられることに気付き、遊びへと発展していく姿に成長が感じられた。

新聞紙を使った実験では、「声が届いて揺れる」と捉える子と、「声がぶつかるから揺れる」と考える子がおり、同じ現象でも一人ひとり異なるイメージをもっていることに気付かされた。

合奏活動では、曲のイメージの違いがある中で、友だちの提案を受け入れ、「やってみよう」と気持ちを合わせていく姿が見られた。互いの考えを受け止めながら、一緒に表現をつくる経験の中で、心が動く大切な瞬間が生まれていた。

こうした活動を通して、声の不思議を多様な視点から探究し、実験や共有を重ねることで、学びが合奏や表現へと広がっていった。子ども自身の気づきや発見を大切にすることが、探究活動において重要であると実感した。

【4歳児実施分】

問いを考える：紙をのどに見立て、息を吹きかけると紙がゆれる様子が見られた。

「どうして紙は動くのだろうか？」という疑問から、声や息のひみつについて、みんなで考え始めることにした。

声だけでなく、ジェスチャーや擬音でも思いを伝えることができるのか問いを重ねた。

絵カードをもとに表現してみると、伝え方に悩みながらも、それぞれが工夫して伝えようとする姿がみられた。どのようにすれば、相手に分かりやすく伝わるのか、小さな声や大きな声で歌ってみると、気持ちの変化にも気づくことができた。

声の大きさによって、どんな違いが生まれるのか、友だちの声はどのくらいの大きさなのか、比べてみることにした。

さらに、生き物の鳴き声に耳を傾けると、「これは何の生き物だろう」「どんな気持ちなのだろう」と想像が広がっていた。

鳴き声だけで会話はできるのか、限られた音（たとえば「ぱ行」）だけで伝えるには、どんな工夫が必要なのか問いかけをした。

オノマトペの本を通して、音の表し方が人によって違うことにも気づく。

音は、言葉だけでなく、動きや色、絵で表すこともできるのか考えた。

ピアノや楽器の音に合わせて体を動かしたり、音を感じたままに表現したりすることで、新しい発見が生まれた。

身の回りの音を探し、その音にオノマトペをつけてみると、普段気づかない音にも目を向けることができた。音と動きをつなげると、どんな表現ができるのか、子どもたち主体で物語を考え、音に合わせて体を動かしてみることにした。

どんな場面で、どんな音が合うのか、どんな動きをすれば伝わるのかを話し合いながら、表現する楽しさを深めていった。

「声」や「音」は、どのようにして生まれ、どのように伝わり、どのように表現できるのか、さまざまな体験を通して、自分なりの問いをもちながら探究していくことにした。

探究活動の様子：声を聞くときは、静かな場所を作り、静かにしてよく聞こえるように気を付けたり、口の動きを真似して積極的に何と言っているか考えていた。ジェスチャーで伝える際、4人グループに分かれて行った。表現方法に悩む姿が見られたが、擬音語を聞くと、分かりやすくなることに気付く姿が見られた。

声の大きさについて考える。大きさ当てクイズをしたり、声の小さいとき、大きいときの歌い方の違いを知り、歌いやすさを保育者と子どもたちとで考えた。

鳴き声クイズをする。知っている鳴き声は積極的に答えるが、分からない鳴き声が聞こえると、友だち同士で相談しあいながら考えていた。同じ生き物でも鳴き声の違いがあり、不思議に思い、子ども同士で驚いていた。

言葉を使わず、鳴き声で会話をしてみる。相手に伝わるようどうすれば良いか考え、鳴き声のトーンや大きさを工夫して、言葉なしで感情や伝えたいことを表現し合う姿があった。

オノマトペについて知る。身近な物から音を出し、何をどうした音かを当てた。普段聞い

ている音を言葉にして興味を持って参加した。一人ひとりが聞こえた音を言葉にして色々なオノマトペが発見できた。楽器や床を叩く音を言葉で表し、鳴らしながら言葉で伝えるようにした。楽器からなる音を「シャンシャン、カンカン」と言い合い、共通の言葉で表す。音と言葉を同時に行うことに戸惑いつつも、自分たちで言葉を決めることで楽しみながら取り組んでいた。

絵本「もこもこもこ」の中の音探しをしてみる。自分の中での音を部屋の中から一生懸命探す姿が見られた。音を鳴らしてみても違ふと感じたり、友だちと「これだ」と合わせたりして楽しく取り組んでいた。その後、保育でグループごとに分かれて音探しをして発表をする。動きにオノマトペを付けることは難しそうにするが、一人が発信すると真似をしてどんどん出てくる姿が見られた。

オノマトペを色や、絵に表現する。悲しそうな音、氷、雨の音は青、水色を使ったり、自分の中で聞こえた音、イメージに合った絵、色を選んだりして、楽しく取り組んでいた。音やストーリーに合わせて体で表現してみる。動きに悩む姿が見られたが、友だちと組み合わせた動きに自信を持ち、表現することを楽しんでいった。音源が変わると、「次はこういうのじゃない？」と意見を出し合いながら、体で表現する楽しさを感じ動きを追求していた。また、話を膨らませることができるようになり、役を分けて演じることの表現遊びを楽しんでいた。

ふりかえり(保育士の気付き)：

声の大きさについては、数値だけではイメージしにくい様子が見られたため、声の大きさ表を用いることで、視覚的に捉えやすくなり理解につながった。今後は、歌う活動の中で強弱や感情表現へと発展させていきたいと感じた。

また、声にはさまざまな表現があり、言葉だけでなく音としても捉えられることを学ぶ姿が見られた。声や音を言葉に変換する遊びを取り入れることで、興味を広げながら探究につなげていくことの大切さを感じた。

オノマトペの活動では、子ども自身が音を選び、鳴らしたり声に出したりしながら探す姿が見られ、一人ひとりの興味が深まっていった。グループで取り組むことで、より楽しみながら多様な表現に触れることができていた。また、ストーリー性を持たせることで、表現がより豊かになることも再認識できた。

クラスで表現遊びを考える際には、一から子どもと一緒に作り上げることで、「やってみたい」「知りたい」という主体的な姿が見られた。音に応じて動きを変えたり、友だちと関わりながら多様な表現を生み出していた。

声をきっかけに、音やオノマトペ、表現遊びへと活動が広がり、子どもたちの気づきや疑問をもとに探究が深まっていく様子から、大きな可能性を感じることができた。

【5歳児実施分】

問いを考える：子どもたちが声をテーマに声の出し方、音の正体、体の仕組み等を、実験を通して段階的に深めていった。最初に、「声はどうやって伝わるのか?」「なぜ聞こえるのか?」という物理的な不思議について考えた。実験として、声の振動を目で見ることに視点を置き、タライにポリ袋を張り、その上に塩をまいて声を出すと、塩はどう動くか、声の「高い・低い」や「近い・遠い」で、塩の踊り方はどう変わるのか?塩以外に、声の振動で動くものは身の回りにあるか等、問いと実験を重ねていった。また、声の伝わり方を糸電話やコピー用紙を用いて、声の聞こえ方や、声が出る時の震えについても考えていった。身近なものを通して声の変化・声の届け方についても、子どもたちといっしょに考え、使用するものは何が良いか等、問うことにした。体の仕組みへと興味移行し、「声はのどから出る」という気づきから、自分の体のコントロールへ意識を向けていった。のどとお腹の観察として、あくびをした時、のどの形はどうなっているのか、寝転んで息を吸うと、お腹はどう動くのかを問い、腹式呼吸への気づきへと展開していった。また、声の出す姿勢についても考える。ペットボトルを両手に持ったり、色々な姿勢で歌ったりすると、声の出しやすさはどう変わるのか考えた。聞く力と表現（ボリューム・音程）にも目を向ける。1～5の段階で、今はどの大きさと話すべきか?歌う時は、どのボリュームが一番きれいに聞こえるか等、子どもたち主体で考えていき、音を揃える心地よさについて知ることが出来た。

探究活動の様子：

音の正体を探るという観点から目に見えない「音」を視覚的にとらえる実験に夢中になって取り組んだ。まずは、ポリ袋にまいた塩が声の振動で動く様子に驚き、「高い声と低い声、どちらが動くか」を意欲的に検証した。その後、身近なもので動くもの（小さな玩具など）を室内から探し出し、「重いと動かないかな？」と重さと振動の関係にも自分たちで気づき始めていた。また、紙の動きを見るためにコピー用紙を使い実験をした。コピー用紙が声の振動で予想通りに動くのを見て、達成感と喜びを感じた。

その後、音を届ける工夫について考えた。道具を使うことで、音が伝わる仕組みや効率について考えを巡らせていった。糸電話の探求では、手作りの糸電話に愛着を持ち、「糸を張ると聞こえる」という法則に子どもたち自ら気づいていた。聞こえない時に「あれ？」と不思議に思う気持ちが、次の工夫へと繋がっていった。道具の選択として筒などの道具を自由に選び、声の変化を楽しんだ。「どの道具が一番聞こえやすいか」をグループに分かれて友だち同士で話し合う、協同的な学びも見られた。

次に 体と声の関係（発声のメカニズム）として、自分の体そのものを「楽器」として捉え、姿勢や呼吸が声に与える影響を実験した。

姿勢による変化では、「丸くなると出しにくい」「立つと歌いやすい」といった体の状態と声の出しやすさを体感的に理解することができた。負荷による変化では、ペットボトルを持って負荷をかけると声が大きくなる発見など、身体感覚を研ぎ澄ませて声の違いを感じ取る姿がみられた。

表現の探求（ボリュームと音程）では、自分の声を客観的に聞き、より良い表現方法を模索していった。ボリュームのコントロールでは、声の大きさを1～5の数値で目安化し、場面に応じた使い分けを検討した。録音した自分の声を聞くことで「聞こえにくい」という課題を見つけ、「叫ばずに遠くへ届ける」方法を的に向かって歌う練習を通して探求した。音の高低では、音の高低を手の動きで表現し、視覚化することで理解を深めようとしていた。高い・低いの違いにはまだ伸びしろがあるが、音をよく聞こうとする集中力が高まっていた。。

ふりかえり(保育士の気付き)：

音の正体について考える上で、目に見えない「音」を物理的な現象として捉えるプロセスでは、子どもたちの科学的な思考の芽生えが顕著だった。喉の振動が紙や塩を動かす様子を視覚的に確認できたことで、抽象的な「声」を具体的なイメージとして捉え、楽しみな

がら学ぶ姿が見られた。深まりという視点では、「重いと動かないかな？」という重さと振動の関係への気づきは、観察から「仮説と検証」へとステップアップした瞬間だった。室内玩具だけでなく、園外や自然物など探索の範囲を広げることで、さらに探究心を深める環境設定の必要性を感じた。道具を通した「伝播」への探究心では、音を届ける道具を通じ、自分の声の変化したり、条件によって聞こえ方が変わったりする現象に強い興味を示した。糸電話で「糸を張る」という法則を自ら発見し、聞こえない時に「あれ？」と立ち止まる姿に、思考の連鎖が見られた。協同的な姿では、筒などの道具を使い、「誰の声か分からない」「どの道具が聞こえやすいか」を友だちと話し合う中で、聞き分ける力と協調性が育まれていたので良かった。手作りの道具に愛着を持ち、楽しみながら試行錯誤を繰り返す姿から、自発的な活動を支えることの重要性を再確認することができた。体そのものを「楽器」として捉える体験では、姿勢や負荷が声に与える影響を実験し、身体感覚を研ぎ澄ませる経験ができた。「丸くなると出しにくい」「立つと歌いやすい」といった体感的な理解に加え、重い物を持つ（負荷）ことで声が大きくなる発見など、自分の体が音を作る源であるという自覚が芽生えた。録音した自分の声を聞き、客観的に「聞こえにくい」という課題を見つけるプロセスは、表現を磨くための大きな一歩となった。

ボリューム調整と音程への挑戦（卒園に向けて）感情のままに声を出すのではなく、場面に応じた「質の高い発声」への意識を高めることができた。声の大きさを1~5で数値化したり、「的を狙って歌う」という視覚的イメージを持ったりすることで、「叫ぶ」のではない「届ける声」を模索する姿が見られた。音への集中：音程をハンドサインで表すことで、音の「動き」を意識できた。口を大きく開けることで音量と音程が安定することにも気づき始めることが出来、良かった。卒園式に向けて、今回学んだ「姿勢」「ボリューム」「口の開け方」を統合し、子どもたちが誇りを持って歌えるよう、遊びの延長で技術を定着させていきたいと思った。

5. 活動の様子が分かる写真

3歳児

活動の様子が分かる写真 2枚以上を貼付してください。



4歳児

活動の様子が分かる写真 2枚以上を貼付してください。
(HPなどで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用してください。)



5歳児

活動の様子が分かる写真 2枚以上を貼付してください。
(HPなどで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。)

